

平成29年11月28日

生駒市議会議長 中谷尚敬様

市民文教委員会委員長 下村晴意

委員会調査報告書

当委員会で調査した事件の調査結果について、生駒市議会会議規則第107条の規定により、下記のとおり報告します。

記

- 1 派遣期間 平成29年10月31日(火)及び11月1日(水)
- 2 派遣場所 佐賀県佐賀市及び福岡県北九州市
- 3 事 件 子ども・若者育成支援の取組について
- 4 派遣委員 下村晴意、白本和久、井上充生、吉波伸治、竹内ひろみ、神山聡
- 5 概 要 別紙のとおり

市民文教委員会視察報告書

視察先	NPO スチューデント・サポート・フェイス 
施策等の名称	子ども・若者に対するアウトリーチを用いた支援について
視察の目的	<p>本市では、不登校、ニート・引きこもりなど様々な困難を抱える子ども・若者が就学や就業など自立した社会生活を営むことができるように、教育・福祉・就労・子育て・更生保護などの各分野が連携して効果的かつ円滑な支援を実施することを目的として、平成28年3月に、子ども・若者育成支援推進法に基づく子ども・若者支援地域協議会として「生駒市子ども・若者支援ネットワーク」が設置されており、平成30年1月から、国の就労支援事業である地域若者サポートステーションの取組も取り入れた総合相談窓口を設置し、取組を拡充していく予定となっている。</p> <p>このような状況を踏まえ、本市における今後の支援の在り方の参考とするため、子ども・若者支援地域協議会の運営の中で実際に支援業務を行う指定支援機関の取組、また、地域若者サポートステーションの取組の中でも、特にアウトリーチ（訪問支援）を用いた支援状況を調査する。</p>
施策等の概要	<p>NPO スチューデント・サポート・フェイスは、平成22年から佐賀県の子ども・若者支援地域協議会における指定支援機関として、佐賀県子ども・若者総合相談センターを運営している。また、佐賀県の地域若者サポートステーション事業、佐賀市自立支援センター事業も受託しており、ワンストップ型に近い相談サービスを提供している。</p> <p>同法人の取組の特徴として、アウトリーチ（訪問支援）を中核としていることが挙げられる。</p> <p>従来の支援は、窓口設置による施設型で利用者による来訪型の支援が主流であり、多くは当事者の自発的な相談行動を前提としている。</p> <p>しかし、同法人では、施設に足を運ぶこと自体に困難を抱えている子ども・若者の存在を捉え、子ども・若者の抱える問題には複合的な要因があると考え、そのような子ども・若者が社会参加・自立を達成するには、生育環境の問題の解消も含め、積極的かつ直接的な支援が必要で、</p>

社会参加・自立まで責任を持って見届ける体制が必要と考えている。

以上を実現するため、複数の専門職によるチーム対応を行うことにより、分野横断的な対応を可能とする専門的支援を行うとともに、関与継続型アウトリーチ（訪問支援）を実践している。



(正面入り口)



(裏口)

※相談者のプライバシーなどに配慮して、裏口からも入ることができる建物を施設としている。

◎NPO スチューデント・サポート・フェイスの沿革

【設立】

○平成15年7月5日設立、同年10月23日NPO法人化

【主な支援対象】

- 不登校、ひきこもり、非行、ニート、生活困窮者
- 社会生活や自立に困難を抱える当事者及びその家族、関係者

【活動概要】

- 家庭教師方式（関与継続型）のアウトリーチ（訪問支援）活動
- 社会的・職業的自立に至るまでに必要な各種相談支援事業

【組織体制】

- 教育学、心理学、社会学等大学教授を中心とする理事会
 - 教育・医療・福祉・労働分野の20代30代の専門スタッフが中核
 - 職員数：常勤55名、非常勤22名、登録スタッフ247名
- ※支援対象者の状況に応じて、研修を経て採用された職員や、地域ボランティア・有償ボランティア（大学生・大学院生・地域人材等）により対応している。

【財政規模】

平成28年度決算として、経常収益は約1億7100万円、経常支出は1億6500万円となっている。おもな収入は、事業受託にともなう補助金となっている。

<p>考察・意見等</p>	<ul style="list-style-type: none">・NPO法人スチューデント・サポート・フェイスの取組の特徴として、以下の点が挙げられ、高い成果につながっていると考えられる。<ul style="list-style-type: none">①従来の施設型支援の「来ることを待つ」のみでは限界あり、アプローチできない。行政の縦割りの限界を超え、他のNPO法人等と連携し、数千の構成団体からなるネットワークで、対象者とどこかでつながりアプローチすることができている。②本人のみではなくその周辺の環境にも問題があることを重視し、一人一人の事情を丁寧につかみ、それぞれにあった支援が必要である。複数分野の専門職が係わることで、それぞれのノウハウを生かし、アセスメントの偏りを防ぎ、適切な支援プログラムを作成することができる。③様々な事業を組むことで、自立まで伴走し、社会的自立まで責任をもつことができる。これまでの取組の中で培ったネットワークと信頼関係を基に、150種の職業、120カ所の事業主の支援を受け、自立につなげている。例えば、雇用してもらうのではなく、一部の作業を提供してもらうことで、支援対象者の職業経験の途絶を補足・解消する「職親」制度などがある。<p>このような活動によって、年間1万件超のアウトリーチを7年連続で行い、9割の改善率を得るという素晴らしい実績を挙げている。</p>④アウトリーチの専門的フィールドを活用した戦略的人材育成として、教育・医療・福祉分野で学ぶ大学生や関係者に対して実地訓練を含む「選抜研修制度」を実施することで、即戦力として問題解決できる人材育成に取り組んでいる。なお、これらの活動には250人が関わっているが、8割が若い世代である。大学生や大学院生が「わがこと・丸ごと」の研修として参加し、教員採用試験でも評価されるようになってきているなど、人材育成の手だてが図られている。・長年の取組の中で培われた、様々な組織との連携ネットワークが構築されており、重層的な支援を可能としている。一朝一夕にできるものではなく、取組が緒に就いた本市において、すぐに実現できるものではないと考えられる。しかし、本市の取組は、奈良県において実績のある団体が受託しており、今後も継続していくことが本市における支援のネットワークの形成につながり、将来的に、実効性の高い支援体制につながると考えられる。・アウトリーチと様々な支援が連携した取組は成果につながっており、評価できるが、取組はマンパワーが重要で、多くの人員が必要と考えられる。しかし、同NPOの人員体制をみると、補助金などの収入で、
---------------	--

	<p>職員の待遇や職員の確保が十分なものとなっているのか考慮する必要がある。</p> <p>今後、本市においても進めていくべき取組と考えているが、実施に当たり、提供できるサービスに対し、運営組織・運営体制が維持、継続できるものとなっているかを考え、市として必要十分な補助を行うことが必要と考える。</p> <ul style="list-style-type: none">・支援は無料（交通費のみ利用者負担）で行われているが、財源は、国、県、市の補助金などである。なかでも、佐賀市の補助が一番大きく、行政の本気のやる気がカギといえる。・これからの、複雑で様々な問題を抱える子ども・若年支援においては、アウトリーチ・ワンストップサービスで対応する体制づくりが必要であるが財源確保もさりながら、そのような体制構築・運用を持続的に担う人材確保ができるかが成功の鍵を握る。 <p>また、問題を抱える子ども・若年への支援体制構築・運用の負担軽減のため、問題を抱える子ども・若年が生まれるのを防ぐ条件・状況づくり（いじめ・不登校等がない学校づくりなど）も必要である。</p> <ul style="list-style-type: none">・相談窓口が人目につかないことや、施設全体が相談対応だけであると、施設に入ることによって相談者であることが分かってしまう。デリケートな問題を扱うだけに、相談者が人目を気にせずに相談に来れるような配慮が必要である。・アウトリーチの重要性として、まず、相談窓口に通うことができない子どもたちに支援の範囲を広げることができる。・同NPOのアウトリーチによる問題の改善率が9割という非常に高い結果が出ているが、同法人の代表理事である谷口氏の功績が非常に大きい。アウトリーチは誰でもできるわけではなく、専門的な知識と経験が不可欠である。本市でアウトリーチによる支援を行う場合、本当にアウトリーチが必要な状況であるのかという実態調査を行うこと、また、専門家による指導を定期的を受けながら、アウトリーチの技術を学ぶ必要がある。・多重困難を抱える子どもたちの実態把握が最重要である。・本人が抱える問題については、これまでの取組でも対応できるかもしれないが、対人、ストレス、メンタル、学習、環境、病気、家庭環境や学校環境など、多面的なアプローチをしなければ、根本的な改善にはつながらない。
--	---

(別紙)

市民文教委員会視察報告書

視察先	北九州市子ども・若者応援センター「YELL」 
施策等の名称	子ども・若者応援センター「YELL」の取組について
視察の目的	<p>本市では、不登校、ニート・引きこもりなど様々な困難を抱える子ども・若者が就学や就業など自立した社会生活を営むことができるように、教育・福祉・就労・子育て・更生保護などの各分野が連携して効果的かつ円滑な支援を実施することを目的として、平成28年3月に、子ども・若者育成支援推進法に基づく子ども・若者支援地域協議会として「生駒市子ども・若者支援ネットワーク」が設置されており、平成30年1月から、国の就労支援事業である地域若者サポートステーションの取組も取り入れた総合相談窓口を設置し、取組を拡充していく予定となっている。</p> <p>このような状況を踏まえ、本市における今後の支援の在り方の参考とするため、平成22年から先駆けて「総合相談窓口」を設置している北九州市の取組を調査する。</p>
施策等の概要	<p>◎「YELL」の運営</p> <p>平成22年の法律施行を前に、平成20年内閣府モデル事業として取組を始めた。平成19年教育委員会と福祉部門を超えた子ども家庭局の所管とし、NPO法人育て上げネット（東京）の視察などを経て、平成22年10月子ども・若者応援センター「YELL」をオープンした。</p> <p>「YELL」は、さまざまな悩みを抱えた子ども・若者を対象に、「ワンストップサービス」で支援をしていくことを目的に開設された「総合相談窓口」である。社会生活を営む上での困難を抱えている子どもや若者の相談を行いその方々の状況に応じた支援機関へつなぐことを目的としている。北九州市福祉事業団が受託して実施。</p> <p>対象者は社会生活困難を抱えた若者（15歳～39歳）とその家族となっている。</p> <p>体制は、臨床心理士3名、キャリアコンサルタント1名を常勤で配置し、他機関との連携などコーディネーターの役割を果たしている。他に</p>

も、60人のアドバイザー、ボランティア等で対応している。

YELLの運営費は年間約2300万円、協議会運営費は年間約300万円となっている。

なお、入所する施設内に、引きこもり相談窓口など6つの支援団体・組織が存在し、連絡や相談など緊密な連携が可能となっている。



◎支援の流れ

個別面談、プログラム活動、他機関との連携を実施

【個別面談】

継続的にカウンセラーと面談し、気持ちの整理の他、適職探しや履歴書の書き方、面接指導など就労に向けた支援を行っている。



【プログラム活動】

若者の自立段階に応じて、コミュニケーション講座、農業体験、ボランティア体験、しごと体験などのプログラムを提供するとともに、まつりへなどイベントへの参加プログラムも用意している。また、一般就労に向けたステップとして「中間的就労」の取組を実施している。

《中間的就労》

プログラム活動などで一定の社会経験を身に付けた若者が一般就労に向けて、生活リズム改善や仕事での報連相の練習、身だしなみ、言葉遣いを習得することで、自信を持って就労に向かうことができるようにするもの。具体的には、北九州市福祉事業団が運営する勤労施

	<p>設「バイトライ」などで就労する。</p> <p>【他機関との連携】</p> <p>北九州市子ども・若者支援地域協議会で他機関とのネットワークづくりを行い、各個別ケースでは、関係機関の担当で構成される実務者会議において、支援状況の進行管理や情報交換等を行っている。</p> <p>いる。</p> <p>※アウトリーチ（訪問支援）については、人材不足などで本格的に実施されておらず、民生・児童委員の取組に頼る形になっている。</p> <p>しかし、中学生で不登校の内、18.1%がニート・ひきこもりになることから、早期にYELLにつなぐことを目的として、中学生を対象として伴走型アウトリーチを試行中で、月2回行っており、来年から本格化する計画である。</p>
考察・意見等	<ul style="list-style-type: none">・自立状況の段階に応じたプログラムの提供、中間的就労などのきめ細かい支援は、より確実に自立・就労につながると考えられるが、取組を始めたばかりの本市としては、まずは相談者を状況に応じた連携機関につなげていくことができるよう、連携体制の充実・拡大が大切であるとする。・支援に該当する子どもや若者へのセンター側からのアプローチをどうしているかという質問に対して、民生・児童委員等地域のネットワークが働いているという回答であったが、一方で、町内会や子供会など地域のつながりが希薄になっている課題を挙げられていたのは、本市にも共通の課題として印象的であった。・関係機関との連携を踏まえ、個人情報の取扱については、書面による承諾書を作成し、支援を求める相談者から関係機関内の個人情報の取扱について承諾を得ており、本市の取組においても重要と考える。・社会参加、就労が成果とするならば、市内の事業者の協力が必要と考える。職業体験や就労先として、市内事業者への補助制度なども必要と考える。